

第一章 花散里の物語

[第一段 花散里訪問を決意]

人知れぬ(内心にある)、御心づからのもの思はしきは(源氏自らの恋の悩みは)、いつとなきことなめれど(今に始まった事では無いが)、かくおほかたの世につけてさへ(こうした大きな世情の変化で)、わづらはしう思し乱るることのみまされば(責め苦に苛まれる事ばかりが増えてくると)、もの心細く、世の中なべて厭はしう思しならるるに(世の中全てに厭気が差して出家を御考えに為ったが)、さすがなること多かり(そうも行かない柵も多かったのです)。

*麗景殿(れいけいでん)と聞こえしは(と申し上げる方は)、宮たちもおはせず(故院との間に子も儲けず)、院隠れさせたまひて後(故院亡き後)、いよいよあはれなる御ありさまを(いよいよ頼りない御身の上でいらしたのを)、ただこの大将殿の御心にもて隠されて(偏に源氏大将の世話で住まいを宛がわれて)、過ぐしたまふなるべし(暮らして御出でだったようです)。*注に<桐壺院の麗景殿女御。「賢木」巻の右大臣家の藤大納言の娘で頭弁の姉(朱雀院の麗景殿女御)とは別人。>とある。「麗景殿」は平安京内裏十七殿の一なる後宮の殿舎名だが、故院亡き後は城内の里邸に源氏が手配して生活の面倒を見ていた、という事らしい。禁忌を犯す事に生甲斐を感じる意地汚さを持つ一方で、弱い立場の女とりわけ王家血筋に対しては身内意識が強く面倒見が良い、という源氏の人物像は繰り返して語られて来ている。

御*乙人(おんおとうと、麗景殿の妹)の三の君(さんのきみ、三女であった姫君は)、内裏わたりにて(源氏が御所住まいの若い時に)はかなうほのめきたまひしなごりの(少しの間情交した事がある)、例の御心なれば(とはいえ源氏の御気性では)、さすがに忘れも果てたまはず(それきり便りをしないでもなく)、わざとももてなしたまはぬに(かといって正式に妻に迎えるでもなく)、人の御心をのみ(三の君の気持ちばかりを)尽くし果てたまふべかめるをも(憔悴させているのかもしれない)、このごろ残ることなく思し乱るる(この所すっかり腐り切っていた)世のあはれのくさはひには(気晴らしの一つに)、思ひ出でたまふには(思い出しなされると)、忍びがたくて(逸る気持ちで)、*五月雨(さみだれ)の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ。*注に<季節は夏、五月雨の時期。この物語(花散里物語)は夏を季節的背景として語られる。>とある。

[第二段 中川の女と和歌を贈答]

何ばかりの御よそひなく(殊更外出めいた格好もせず)、うちやつして(ごく地味な服装で)、御前(ごぜん、前払いの先導騎)などもなく(も居ない少人数の牛車仕立てで)、忍びて(全くの私用で)、*中川のほど(中川の辺りを)おはし過ぐるに(御通りになると)、ささやかなる家の(小さな家で)、木立などよしばめるに(木立の風情が良い庭に)、よく鳴る琴を(響いている箏を)、あづまに調べて(和琴に合うように調弦して)、搔き合はせ(合奏し)、にぎははしく弾きなすなり(賑やかに弾き為していました)。*「中川」については注に<京極川の二条以北をいう。「帚木」巻にも中川が出てきた。貴族の別荘が多い辺り。>とある。

御耳とまりて、門近なる(かどぢかなる、門に近い)所なれば(所に差し掛かったので)、すこしさし出でて見入れたまへば(車から少し身を乗り出して其の家を覗き込まれると)、大きな桂の木の追ひ風に(庭の大きな桂の木の匂いが風に運ばれてきて)、祭のころ思し出でられて(葵祭の頃が思い出されて)、そこはかとなくけはひをかしきを(そこはかとなく情緒があったので)、「ただ一目見たまひし宿りなり(此処は一度だけ訪ねた事がある女の家だ)」と見たまふ(とお気付きになりました)。

ただならず(そうなると気も漫ろで)、「ほど経にける、おぼめかしくや(ずいぶんと前の事だが、はっきり覚えているかどうか)」と、つつましけれど(気が引けたが)、過ぎがてに(行き過ぎ難てらに)やすらひたまふ(躊躇されて)、折しも(ちょうど其の時に*歌の文句のように)、ほととぎす鳴きて渡る(ホトトギスが鳴いて飛んで行きました)。*注に<『異本紫明抄』は「夜や暗き{夜の暗さに} 道や惑へる{道を迷ったのか} 郭公{ほととぎす} わが宿をしも{我が家の粗末な庭先を} 過ぎがてに鳴く{去り難そうに鳴いている}」(古今集夏、一五四、紀友則)を指摘する。歌中より第三句「郭公」第五句「過ぎがてに」の語句を用いる。({内は私訳})>とある。しかし、この歌は歌意が良く分からない。恐らくは「夜や暗き」と「わが宿をしも」に何か特別な意味か事情があるのだろうが、不明。ただ、ホトトギスは<カッコウ科の鳥。全長28センチくらい。全体に灰色で、胸から腹に横斑がある。アジア東部で繁殖し、冬は東南アジアに渡る。日本には初夏に渡来。キョキョキョと鋭く鳴き、「てっぺんかけたか」「ほぞんかけたか」「特許許可局」などと聞きなし、夜に鳴くこともある。自分の巣をもたず、ウグイス・ミソサザイなどの巣に托卵する。古くから春のウグイス、秋の雁(かり)とともに和歌に詠まれ、また冥土に往来する鳥ともいわれた。(大辞泉)>とあるので、どうやら托卵する事と関係が在りそうではある。托卵する前の交尾も含めて。

もよほしきこえ顔なれば(そのホトトギスの鳴き声が催促している様に聞こえたので)、御車おし返させて(源氏は御車を押し戻させて)、例の(例によって)、惟光入れたまふ(取次ぎに惟光を差し向けてこう朗唱させなさいました)。

「をちかへり えぞ忍ばれぬ ほととぎす、ほの語らひし 宿の垣根に」(和歌 11-01)

「琴の音に歌うホトトギス、飛び去りがてらの懐かしさ」(意識 11-01)

*注に<源氏の贈歌。惟光が朗誦する。昔のころが堪えられなく思い出されて、お逢いしたいの意。>とある。「復ち返り(昔を思い出す鳴き声で) えぞ忍ばれぬ(行き過ぎるのに忍びなくさせる) ほととぎす、ほの語らひし(静かに和んだ) 宿の垣根に(懐かしい宿なので)」という所だろうか。それほど凝った歌でも無さそうで、この歌の為にホトトギスを登場させたというよりは、この歌を玄関先で朗誦する惟光の佇まい自体が良い風情なのだろう。

寝殿とおぼしき屋の西の妻に人びとあたり(主人の住まいらしい舎屋の南玄関で惟光が様子を窺うと西側の部屋に女房たちが居ました)。先々も(女房らの声は以前にも使いに来た惟光には)聞きし声なれば(聞き覚えのある声だったので)、声づくりけしきとりて(源氏の来訪と分かるような抑揚で)、御消息聞こゆ(この歌を朗誦しました)。若やかなるけしきどもして(奥で若そうな女房たちが話し合う声がして)、おぼめくなるべし(怪しんでいるようです)。

「ほととぎす言問ふ声はそれなれど、あなおぼつかな五月雨の空」(和歌 11-02)

「誰かと思えばホトトギス、五月雨模様の頼りなさ」(意識 11-02)

*注に<女の返歌。源氏の君とは分かるが、今ごろ何のご用ですか、ととぼけた意。>とある。「五月雨さみだれ」は急に降る不意のわか雨。この歌は今でも其のまま通じる分かりやすさ。

ことさらたどると見れば(「それなれど、おぼつかぬ」とは殊更にとぼけた振りで断って来ていると見て取った惟光が)、「よしよし(そうか)、*植ゑし垣根も(家を間違えたようだ)」とて出づるを(と言って出て行くのを)、人知れぬ心には(女主人は内心では)、ねたうもあはれにも思ひけり(悔しくも寂しくも思いました)。 *「植ゑし垣根も」について注は<『異本紫明抄』は「花散りし庭の木の葉も茂りあひて(花が散った庭は草木が茂って)植ゑし垣根も見こそわかれぬ(植えた垣根も見分けが付かない)」(出典未詳)を指摘する。第四句の「植ゑし垣根も」による。垣根が見分けられない、家を間違えたのか、と引き下がる意。>とある。引歌自体にも皮肉っぽさを感じる。

「さも(そのように断らなければ為らない)、つつむべきことぞかし(憚りのある別の殿御が居るのだろう)。ことわりにもあれば、さすがなり(尤もな事で、仕方あるまい)。かやうの際に(この女のような身分の者と言え)、筑紫の五節(ちくしのごせち)が(という女が)、らうたげなり(可愛かったものだ)」と、まづ思し出づ(すぐ思い出さいます)。

いかなるにつけても(何にしても浮いた話に事欠かず)、御心の暇なく苦しげなり(御心の休む間も無く大変そうでした)。年月を経ても(相当に絶えて久しくても)、なほかやうに、見しあたり(思い合った者には)、情け過ぎたまはぬにしも(情けをお忘れに為らないので)、なかなか、あまたの人のもの思ひぐさなり(却って多くの女が困惑していたのです)。

[第三段 姉麗景殿女御と昔を語る]

かの本意の所は(当初の宛先の麗景殿女御の里邸は)、思しやりつるもしるく(予想していた通りに)、人目なく(使用人も少なく)、静かにておはするありさまを見たまふも(ひっそり暮らして御出での様子を御覧に為ると)、いとあはれなり(源氏は御所での華やかな暮らし振りとの違いにとても深い感慨を持ちました)。

まづ、女御の御方にて(姉君の女御の御部屋で)、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。*二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き蔭ども木暗く見えわたりて、近き橘の薫りなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど(お年を召しているが)、あくまで用意あり(女らしい嗜みを損なわず)、あてにらうたげなり(上品で愛らしくしておいででした)。 *注に<五月二十日の月。午後十時ころ出る。>とある。月齢二十日の月の出は、確かに午後十時頃らしいが、二十日の月という言い方が定型句のようなもので、満月を過ぎた陰りと其れなりの夜更けを思えば、時間はもう少し早めの含みが在ってもいい気がする。

「すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど(この女御は特に目を引くほどの御寵愛を御受けではなかったが)、むつまじうなつかしき方には思したりしものを(院が和やかに親しみをお持ちに為って居らした方だった)」など、思ひ出できこえたまふにつけても(思い出し申し為さ

れるにつけても)、昔のことかきつらね思されて(故院の御代の御所暮らしの華やかさを次々と御思いに為って)、うち泣きたまふ(源氏は涙ぐまれます)。

ほととぎす、ありつる垣根のにや(さっきの中川近くの家垣根に居た鳥だろうか)、同じ声にうち鳴く(同じ声色で鳴きました)。「慕ひ来にけるよ(私を慕って追って来ているよ)」と、思さるるほども(思ってみるのも)、艶なりかし(趣向が在りました)。「*いかに知りてか(如何してホトトギスが昔の事を知っているのだろう)」など(という古歌を)、忍びやかにうち誦んじたまふ(源氏は小声で口ずさんでいらっしやいました)。*注に<『源氏積』は「いにしへのこと語らへば郭公いかに知りてか古声のする」(古今六帖五、物語)を指摘する。>とある。「古声(ふるごゑ)」はホトトギスが昔通りに鳴く>という言い方で歌に詠まれる言葉、との事。で、其の「古歌」の意味を Web 検索すると、「やまとうた」サイトの額田王(ぬかたのおおきみ)と弓削皇子(ゆげのみこ)のページに万葉集の 111 と 112 の贈答歌として、また弓削皇子の 1467 の歌にも、ホトトギスを詠み込んだ歌の解説が紹介されていた。歌の詳細は同サイトの掲載継続を願うが、ホトトギスの「古声」について額田王のページに<過去を偲んで悲しげに鳴く鳥と考えられた。一度帝位を退いたのち復位を望んだ蜀の望帝が、その志を果たせず、死してほととぎすと化し往時を偲んで昼夜分かつ鳴いた、との中国の故事に由ると言う。>という解説があった。要するに<遣る瀬無い未練の鳴き声>らしい。

「橘の香をなつかしみほととぎす、花散る里をたづねてぞとふ (和歌 11-03)

「香り橘ほととぎす、花散る里をわざと訪ねる (意識 11-03)

*歌面は「橘の香ほりを懐かしんだホトトギスが、花の散ってしまった此処の里に名残りを追い求めて遣って来ました」ということで、源氏が自らを「ホトトギス」に例えた来訪の挨拶に成っている。「橘」は柑橘系の香り高い植物で、紫宸殿正面階下に左近の桜と右近の橘が配されているように、御所の象徴とも言える花なのだろう。「ホトトギス」に昔を偲ぶ含みのある事は既に見た。分からないのは「花散里」の含みだ。注釈には<「橘の花散里の郭公片恋しつ鳴く日しぞ多き(万葉集八、一四七七、大伴旅人)を踏まえる。以下「思さるらむ」まで、源氏の詞。「花散里」はここでは邸の名前、後に妹三の君の呼称となる。>とある。下歌は「橘の花が散ってしまった里のホトトギスは名残りを惜しんで鳴く日が多い」ということだから、この源氏の歌は下歌を其のまま踏襲している。「橘」は香りが素晴らしい事と揮発性で刺激的だが果敢ない事から<栄光>を象徴付けられた。「ホトトギス」は未練がましきも在るが五月の新緑を告げて見事に夏を演出する。そこで「花散里」は「橘」「ホトトギス」との三点セットで<侘しくも風情ある栄華の名残り>を象徴付けられた言葉のようだ。

いにしへの忘れがたき慰めには(昔を偲ぶ慰めには)、なほ参りはべりぬべかりけり(何より此方へ伺うべきでした)。こよなうこそ(何処より身に染みて)、紛るることも(気が紛れる事も)、数添ふこともはべりけれ(数多く御座いました)。おほかたの世に従ふものなれば(誰も時流に乗ろうとするので)、昔語もかきくづすべき(昔話を一つづつ語り合える)人少なうなりゆくを(人が少なくなっていくのを)、まして(私以上に)、つれづれも紛れなく思さるらむ(貴方様は何とも紛らわしうもなくお思いの事でしょう)」

と聞こえたまふに(と源氏が申しなさいますと)、いとさらなる世なれど(全くその通りの世の中で)、ものをいとあはれに(時勢の移ろいをととても寂しく)思し続けたる御けしきの浅からぬも

(思い続けた様子が色濃く残る麗景殿女御の)、人の御さまからにや(御人柄でしょうか)、多くあはれぞ添ひにける(とても労しく感じられました)。

「人目なく荒れたる宿は橘の、花こそ軒のつまとなりけれ」(和歌 11-04)

「橘だけは知っている、侘しい宿に咲いていた花」(意識 11-04)

*注に<麗景殿女御の返歌。「橘」の語句を受けて返す。「つま」は「端」の意と「手がかり」の意を掛ける。『完訳』は「橘の花が軒端に咲いて、懐旧の念を抱くあなたを誘い出すやすがになった、の意。ここにも源氏をほととぎすに見立て、故院時代の記憶に生きる人とする」と注す。>とある。

とばかりのたまへる(女御はそう仰るばかりでしたが)、「さはいへど(その歌の詠み方は)、人には(あの中川の女とは)いとことなりけり(段違いの優雅さだ)」と、思し比べらる(源氏は思い比べて御出ででした)。

[第四段 花散里を訪問]

西面には(にしおもてには、三の君が住まう西座敷には)、わざとなく(改まった風では無しに)、忍びやかにうち振る舞ひたまひて(そっと静かに移って行かれて)、覗きたまへるも(顔を御出しに成ったので)、めづらしきに添へて(姫君は大将の訪問がめづらしい上に)、世に目なれぬ御さまなれば(世にも稀な美しい顔立ちでいらしたので)、つらさも忘れぬべし(長くお見えにならなかった辛さも忘れてしまったでしょう)。

何やかやと、例の(いつものように)、なつかしく語らひたまふも(情を込めて源氏が御話しなされるのは)、思さぬことにあらざるべし(思っても居ない口先だけの愛想では無いようでした)。かりにも見たまふかぎりは(元々源氏が御相手に為さる方は)、おしなべての際にはあらず(並大抵の御身分では御座いません)、さまざまにつけて(其々の方の特徴は様々でも)、いふかひなしと思さるるはなければにや(取り立てて何も言う甲斐が無いと思われる方は居ないでしょうか)、憎げなく(憎からず思って)、我も人も情けを交はしつつ(自分も相手の女も思いを通い合わせつつ、いつまでも別れる事無く)、過ぐしたまふなりけり(お過ごしになるのです)。

それをあいなしと思ふ人は(そういう曖昧な間柄を物足りなく思う女は)、とにかくに変はるも(他の男に心変わりするの)、ことわりの、世のさが(仕方の無い世間の有様だ)と、思ひなしたまふ(思い為しなさいます)。ありつる垣根も(先程の垣根違いの中川の女も)、さやうにて(そういう理由で)、ありさま変はりにたる(心変わりしてしまった)あたりなりけり(類の人なのでした)。

(2009年6月18日、読了)